

いま高騰している 野菜類の動向

野菜の動きがおかしい。東京市場の2017年の10月中旬は、前年が高騰したのとは対照的に、野菜のキロ平均単価が180円と近年まれに見る安さだった。しかし、その後は一転して上がり始め、例年相場が上がる12月下旬には、平年の3割高で360円を超えた。そして年明け。例年なら需要も落ち、

入荷は大きく減少する。価格も240円程度にまで下がるものだが、今年の年明けには385円とさらに高騰している。これまで2〜3カ月の推移と今後の見通しは、経験豊富な野菜のプロも「どうなるのか全く予想がつかない」とお手上げ状態だ。これら高騰野菜の動向を見てみよう。

野菜生産者のための相場研究

キャベツ

年明けには前年の2・3倍も高騰。寒波で大被害

【概況】

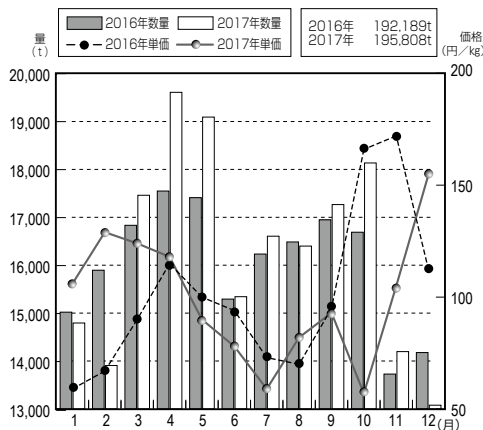
東京市場におけるキャベツは、年間で入荷量も単価もほぼ平年並みだ。しかし、18年の年明け時点では、入荷量が前年を23%下回り、単価は2・3倍の248円と大きく高騰した。17年の12月時点では、それでも8%程度の入荷減で単価は約4割高だったが、年明けにはそれをはるかに超えた。この時期に豊富に出回るはずの葉物野菜やハクサイなどが高く、万能なキャベツに地場の小売店から地方の市場まで、さらなる需要が集まった。

【背景】

12月は、千葉を中心とする関東産地が前年並みの出荷だったが、半分を占める主産地・愛知が2割も減って、単価高を誘導してしまっただけで、数量を補うために、東北や長野からの入荷や中国産までが入荷した。生育期の低温と干ばつ気味の天候の影響で、同じ現象がブロッコリーでも起きている。時々起きるこの時期の品薄を当て込んで、北海道ではほぼ捨てづくり的に雪中貯蔵をしたものだが、2年前の圃場被害がまだ尾を引いているのか。

【今後の対応】

キャベツはごく基本的な野菜だけに、1年中、どこかの地域でも生産されているものだが、今年の冬は日本列島全般に寒気が強く、また日本海側の北から西まで広い範囲で豪雪に見舞われている。露地の大型野菜も葉物野菜もどの品目も少なくて高い現状では、さすがに困ったらキャベツという選択肢がなく、モヤシや豆苗など工場製品やカット野菜などを買っしかない。ただし、これも春に向かつて天候も落ち着けば、需給関係は緩和してくるはずだ。



ハクサイ

入荷増でも高騰した品質の問題。茨城で供給変わる

【概況】

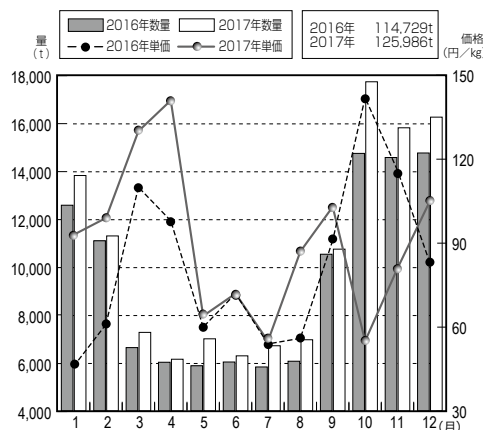
東京市場のハクサイは、17年の10月には数量も多く単価も55円と、16年に142円と高騰したのとは対照的だ。しかし、11月の寒さで需要が強くなると81円、12月には105円と上昇し、年明けには146円に達した。今シーズンは冬の到来が早く、鍋需要が一気に来たための強気配だ。ただ、12月の単価は前年の26%も高かったが、入荷は10%増えており、年明けも46%の単価高でも前年より5%多い。

【背景】

近年、市場では相対取引や契約的取引の割合が増えており、かつてより相場の乱高下は少なくなった。しかし、相場はあくまでも需給関係で決まっていけるものだ。例年通りの生産であっても、ハクサイは暖冬ならあまり売れないし安く、厳冬ならこの時とばかりに売れて高くなる。ハクサイは日本人の冬の国民食・鍋物の必需野菜であり、しかもハクサイでかさ増ししないと成立しない、最強のバイプレーヤーなのだ。また、生食するハクサイの小売店需要は、鮮度がいい良質品である。

【今後の対応】

ヒントは冬場の圧倒的な主産地・茨城の産地事情にある。近年とくにハクサイの需要はキムチにとどめを刺す。漬物メーカーは、半年近い供給力のある茨城産を中心に取引契約をしている。茨城のハクサイ生産者は、安定した経営ができていくが、そのためには需要先との契約内容を死守しなければならない。今年の茨城産は不作傾向で、出荷されるものは小玉傾向で品質は良くない。だからいいものはより高く、品質が悪くても高値傾向になる。



今年の市場相場を読む

流通
ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オビニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。

ホウレンソウ

寒さ好き品目でも極寒に生育が止まる。全滅状態に

【概況】

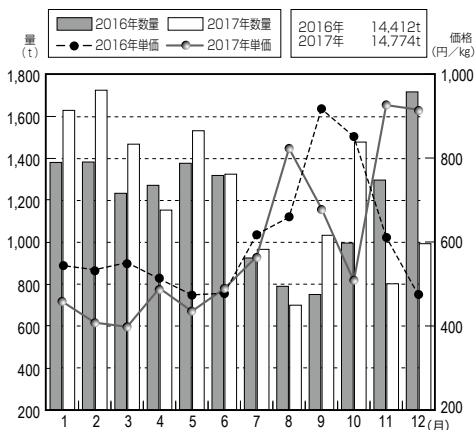
東京市場のホウレンソウは、17年の10月までは入荷量も前年より15%も多かったのだが、11〜12月には前年同月の4割近く減って単価も2倍近く高くなった。年明けには前年よりやはり3割も少なく、単価は2.3倍と高騰した。11月出荷の作型が、想定外の寒さで途端に生育が止まったように遅れ始め、その後も寒波が続いていたため、寒さ好きといわれるホウレンソウも、遅れに遅れて年明けを迎えたのである。

【背景】

この時期、葉物野菜の中心はホウレンソウであり、最も美味しい旬である。その中心的な葉物が少ないため、やはり入荷が少ないコマツナは12月で85%高、シユンギクは64%高、入荷が減っていないチンゲンサイも、そのあおりを受けて54%高となっていた。こうした傾向は、年明けにはさらに強まっている。今シーズンは寒気が強く、まさに寒締めが商品的には面白いのであるが、なにしろ生育が遅れているために、本格化しない。出荷増が待たれる。

【今後の対応】

冬場の旬のホウレンソウは、群馬、茨城、埼玉、千葉などの関東近郊産地が受け持っている。これだけ産地が広範囲に広がってれば、どこかが不作でも他産地が補完することができるはずだ。そんな産地地図であるにも関わらず、今年は17年の荒れた年よりさらに少なく高い。大型産地の多い北関東では寒さと雪が重なっての収穫遅れもある。年明けによりやく降雨の日や暖かい日もあって生育回復が期待できるが、一転して大寒波が来る可能性もある。



レタス

産地リレーが発。供給不安定な冬場にCMは問題に

【概況】

東京市場のレタス類は、17年の夏から10月まで潤沢な入荷で、とくに10月などは前年の33%も増えていた。しかし、11月に入ると25%も入荷減、単価も6割も高い453円、12月はさらに前年比では4割も少なく単価は2.3倍だ。18年に入ってもその傾向は続いている。11月までの主産地・茨城が低温で生育が遅れ、12月には切り替わってくる静岡、香川も遅れていて、産地リレーも不発で端境期による典型的な品薄状態だ。

【背景】

この時期、とくに春レタスの生産・出荷が不安定になりやすいのは、冬に入るタイミングでの生育期の不安定な気象条件と、産地入れ替えの端境期に当たるからだ。また、加工業務用で必需品であるキャベツ、レタスのうち、どこでも生産があり輸入品でも代替できるキャベツと異なり、レタスは特定の産地のシェアが高く、輸入も容易ではない。つぶしの利かない品目なのだ。そのため、いま春レタスの台湾での委託生産が大きく注目されている。

【今後の対応】

なぜか、香川県が「レタスは香川県産を」とテレビCMを打っている。この時期の香川産は、茨城産の後を受けて、マーケット、とくに加工業務用に対して責任を持って供給する義務があるだろう。他県は代替できないのだから。それをテレビで宣伝したら、一般消費者の需要が発生してしまう可能性が高い。供給が不安定な時期に、あえて需要を拡大するようなやり方は問題である。わざと品薄・高騰を期待した仕掛けのように見えない。

